

正校  
七部集

乾

イ 4  
3157  
35 (1)





14-3157-2111

八雲龍守  
一葉舎仙鳧  
校訂

校  
正  
七部集

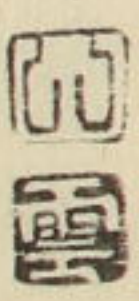
椀屋 江嶋伊兵衛版

凡例

一 世に御借りのやうなものを申す所のやうな本は、  
 一 芭蕉翁正風の一道と世にひりあへんとせむもの  
 一 門人の誰れとせむものとして撰集せられたるもの  
 一 祖翁のよきものとそのそとたる者へかれを懸盪と  
 一 せむ書にあらざる小今流布の印本のものと粗漏は  
 一 て書字の誤多くともなす為ふり意きこころを感ひ  
 一 と抱く者もなすをよりこころを元禄の古板によ  
 一 とさらし真蹟及び諸集と参考し諸家の高説によ  
 一 りて悉く誤とせむを故本校正七部集といふ  
 一 一 個々ついでに古學に因ててやせむものも俗談俚  
 一 言ふいふやうに心をもたせむものも首の近きもの  
 一 一 詩題のたぐひに元禄の古板といふと誤字脱字  
 一 ありて本書に就て正す  
 一 一 校正ちうらむと波風らうとも猶誤あり予々草庵と  
 一 一 却てとくへ速小改正とせむものもかゝるに  
 一 一 幸事矣孟春あはれ大城のものと申橋のものと  
 一 一 せむものも



無用読者印



乾の巻

春の日

初丁より六丁まで

春の日

七丁より十二丁まで

いさこ

十三丁より十八丁まで

猿蓑

十九丁より二十四丁まで

續猿蓑

二十五丁より三十丁まで

坤の巻

阿羅野

初丁より二十八丁まで

炭俵

二十九丁より三十二丁まで

春の日

曙えんと人々の戸叩きあひく  
熱田のうらふゆきぬ後し舟はさる  
しるしやけは並宿のこゝろをさう  
ていねくうあり重五うねおるる  
竹牆をもちまこももちまこもあめ  
まきまきまきまきまきまきまき

二月十八日

まきまきまきまきまきまきまきまき

荷兮

揚ちる中馬のりりく

連

重五

うらむ心はつゆり

鏡

西桐

僅ちつゝのたふあゝるかり

李

李瓜

まむゆふらうくきけを路あり

昌

昌主

らりふ沖の思ふあゝるええ

執

執筆

順慶寺ふ汗の帷子脱うす藤

重

重五

ゆのくは

不

荷兮

文王のくち

土

李瓜



雨の雫の角のなき草  
 机多し一度ハ骨をわく世ふ  
 傾城乳をこくくも居 明  
 霧ららふ後ふ人の影うつこ  
 りもくくもみと神輿のく里  
 も居より半道奥の砂行く  
 花ふも男の命きあふは  
 柳よも陰をさくくふ鞠あふや  
 入るもみくくも影のくもあふ  
 うのりりとまあふらふ不連流く  
 うの情くくく 梓きくくあふる  
 鳥交となもあふるわくふ切あふ  
 いもゆうくくもみ危の針を  
 松のあふもあふる門のうらふた  
 ともくの浪色をさぬ時るそ  
 朝顔豆腐とさきふらふはるる  
 念佛さくくふ秋あふるさきふり  
 穂茨生ふ藏とゆひは佳きくく

兩桐 荷兮 昌圭 重五 李凡 而桐 荷兮 昌圭 兩桐 重五 李凡 昌圭 李凡 重五

歌をを橋の名ふよるる月  
 峰の内を付ふちるる雨の昏ふ  
 ね無あふく出家わくくく  
 ねもきくくあふるさきふらふ  
 泊霧はくく川を二人してわき  
 世ふあもあふる後ふ年さくく  
 絶念ふらふらふ後城の萱 畑  
 いもきを花と竹をふいもくく  
 舟ももきをさくくくく小ゆく

荷兮 李凡 兩桐 荷兮 昌圭 兩桐 重五 昌圭 李凡

三月六日野水亭あふ

ちらばや柳の川山の八きちくく  
 ねもくくくくくくくくくく  
 まの流帯供あふるらん袴あて  
 ばもくくくくくくくくくく  
 松角ふたふもぬ松の滝の波  
 賣のこくくくくくくくくく  
 とも向き太秦あふるくくく

且葉 野水 荷兮 越人 楓笠 執筆 野水

兼あるはつらつらよのふらふらとく  
 表町申川つらつら二人登別ん  
 吃いのつら車申くそち  
 舞負つら大津の橋ふつらつら  
 何やらつらんふらふのふら  
 遊をわくふらふらとつらつら  
 羨ふらつらふらふら日のつら  
 里ふら暮とつらつら秋のふら  
 舟ちつらつらつら車石つらつら  
 あつらつらつらあつらつらつら  
 楓そつらつらつらつらつら  
 のつらつらつらつらつらつら  
 内侍のつらつらつらつらつら  
 おおつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 大羊い合佛とつらつらつらつら  
 わのつらつらつらつらつらつら  
 朝夕のつらつらつらつらつらつら

且藁 越人 荷兮 野水 越人 羽兮 野水 越人 荷兮 野水 越人 荷兮 野水 越人 荷兮

鳥吉つらつら日とつらつらつら  
 一つらつらつらつらつらつら  
 こととつらつらつらつらつら  
 湯炎のつらつらつらつらつら  
 たるつらつらつらつらつらつら  
 田とつらつらつらつらつらつら  
 力のつらつらつらつらつらつら  
 漣や三井の末寺のつらつらつら  
 さつらつらつらつらつらつら  
 君のつらつらつらつらつらつら

羽空 野水 且藁 越人 荷兮 野水 越人 荷兮 野水 越人 荷兮 野水 越人 荷兮

三月十六日且藁う田家ふらつら

○春の日

茅の穂を揺る 傘の端  
穢きもふ穂原鬼の傍の暮りて  
岩のあはより 蔭えぬる里  
るの日は 籠燈やん 燈の  
ひくもさるのし 燈の一は  
あはる 蔭をい 蔭をい 蔭をい  
解てや おうん 枝むさく 松

執筆 且葉 野水 荷兮 越人 野水 冬文

今宵は 文くうとて やしん

冬文

回十九日 荷兮 室うく  
嘆きき の 菊 ありとて 自安そ  
秋の和 ありとて 順

越人 且葉

抑丁の 声ふ 声のうらた 大とすぬ  
別の 月 ありとて ありとて  
別を 花 ありとて ありとて

冬文 荷兮

まゆ ありとて ありとて ありとて  
水と ありとて ありとて ありとて  
美の 子 ありとて ありとて

野水 荷兮 越人

佐 ありとて ありとて ありとて  
佐 ありとて ありとて ありとて

野水 越人

連 ありとて ありとて ありとて  
流 ありとて ありとて ありとて  
岩 ありとて ありとて ありとて  
むと ありとて ありとて ありとて  
遠 ありとて ありとて ありとて  
湖 ありとて ありとて ありとて  
基 ありとて ありとて ありとて  
舟 ありとて ありとて ありとて  
も ありとて ありとて ありとて  
あ ありとて ありとて ありとて  
は ありとて ありとて ありとて  
系 ありとて ありとて ありとて  
解 ありとて ありとて ありとて  
山 ありとて ありとて ありとて  
山 ありとて ありとて ありとて

冬文 越人 且葉 野水 荷兮 越人 野水 冬文 荷兮 越人 野水 冬文 荷兮 越人

追加

三月十九日 舟泉亭

山 ありとて ありとて ありとて

越人

○春の日

蝶水はくしうおろくそそー  
きつろくや麻晒まきそあうく  
り幸のよきうはふち 雲  
報りと春の川 雁のつらうく  
月夜とそそお 門をぬくのを

舟泉 聽雪 蝨鬘 荷兮 執筆

春

昌隆のねとハそぬ法代の春  
え日のあはるの競馬まはし  
初春のをや牛糸ちまき日か  
くくつさ海にわたりあり麦の赤  
門をねる葉國のまきさむし  
鯉のききあはるのまき梅白し  
舟くの少ねふきのゆりりり  
雲のふれおまふひらきりり  
橋てくまえ日里の晴らうれ  
そそくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

利重 重五 昌圭 雨桐 舟泉 羽笠 且菓 杜幽 屏々 吞霞 聽雪

朝日二分柳のうとくく自ひか  
先娘てあまの葉ひくそまこりか  
芥持とてらけて酒ねと飄うぬ  
のうれとく人の涙くめとく  
そくまはらゆのや夕うそみ  
古池や慈奈くらむあのみ  
命法の晴り胡蝶のやとらふ  
山をた晴想くくの酒をやく  
そふくつわんてそあうりまふ死んか

荷兮 且菓 越人 芭蕉 重五 龜洞 越人

春野吟

足跡より橋を曲る看やうり  
ふれと寺うくれぬわのいさく  
櫻木まて桜の造きかううれ

杜國 李凡 荷兮

餞別

着の荒くくくく別うれ  
山畑の葉つくとくく夕りふ  
あひくくくくくくくくく

越人 重五 全

夏

厚くもさそそのしもの尾はさし  
 新とさむねと枝とめる枝と  
 かりとも極道の衆門の一里塚  
 られとさむねと枝とめる枝と  
 五竹のうらりうらりさきさきの  
 傘とさむねと枝とめる枝と  
 武蔵坊とさむねと枝と  
 まくうけやまて申くさのさ川  
 馬とさむねと枝とめる枝と  
 老聃曰知足之足常足  
 タウのふれ枝とめる枝と  
 葉のふれ枝とめる枝と  
 けささむねと枝とめる枝と  
 葉のふれ枝とめる枝と  
 葉のふれ枝とめる枝と  
 葉のふれ枝とめる枝と  
 葉のふれ枝とめる枝と  
 葉のふれ枝とめる枝と

九白  
 李凡  
 越人  
 杜國  
 龜洞  
 舟泉  
 商露  
 聽雪  
 越人  
 柳雨  
 聖交  
 荷兮  
 全  
 昌圭  
 重五

譬喻品三界無安猶如火宅

とらふ心を

六月の汗のころの居る其ころの  
 越人

秋

菅の如きまはるまはるまはるまはる  
 且藁

貧家のむま

むまむまむまむまむまむまむま  
 越人

たきくまむまむまむまむまむま  
 雨桐

そむれくまむまむまむまむまむま  
 芭蕉

山寺のふれ枝とめる枝と  
 越人

毛くふれ枝とめる枝と  
 野水

八島とさむねと枝とめる枝と

具とさむねと枝とめる枝と  
 全

待恋

さあ後とさむねと枝とめる枝と  
 荷兮

閑居増恋

秋のふれ枝とめる枝と  
 全

柳白のふれ枝とめる枝と  
 舟泉

○春の日



冬

馬のあれ斗の夕日の村のあれ 杜園

芭蕉翁と寄一はらりく 大垣住 如行

雪のふりし葉のふりし葉のうね 昌碧

ふりし葉のふりし葉のうね 芭蕉

ひげの葉のふりし葉のうね 越人

芭蕉翁と寄一はらりく時 杜園

こねるのふりし葉のうね 杜園

隠士ふりし葉のうねをまうけて 荷今

ひげの葉のふりし葉のうねをまうけて 荷今

貞享三丙寅年仲秋下院

冬の日

筆はも途のあふほろろひ感後ハ

とありくのありくにからり

俺はくくくくくくくくくくく

ふかむえたるむくくくくくく

國ふくくくくくくくくくく

出てゆくはらり

狂白くくくくくくくくくくく 芭蕉

もくくくくくくくくくくく 野水

有湘の白くくくくくくくく 荷今

うくくくくくくくくくくく 重五

朝鮮のほくくくくくくくく 杜園

日けくくくくくくくくくく 王平

我意のくくくくくくくくくく 野水

雪のくくくくくくくくくく 芭蕉

ソノくくくくくくくくくく 重五

きくくくくくくくくくく 荷今

新法のくくくくくくくくくく 芭蕉



庭ふらぐく流るるいとくたるる男  
あさまきくけの眼みはくろく  
只とくく痛とちまきる刀なき  
唯ひくくくくくくくくくくく  
小まらふまきくくくくくくく  
月ひまきくくくくくくくく人  
渾わくくくくくくくくくくく  
まゆくくくくくくくくくく  
おれの世界とくくくくくくく  
うくくくくくくくくくくく  
様くくくくくくくくくくく  
うくくくくくくくくくくく  
源くくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくく  
及くくくくくくくくくくく  
はくくくくくくくくくくく  
奉加めくくくくくくくくく  
いくくくくくくくくくくく

荷兮 芭蕉 野水 重五 杜園 荷兮 野水 芭蕉 重五 杜園 荷兮 野水 芭蕉 重五 杜園 荷兮

並に小誓のまはくくくくく  
定くくくくくくくくくく  
かみくくくくくくくくく  
意をぬきまきくくくく  
秋輝の度くくくくくく  
着の實はくくくくくく  
徒より奴をくくくくく  
ひくくくくくくくくく  
三ヶの花鬘結尾あくく  
くくくくくくくくく  
杖とくくくくくく  
はくくくくくくく  
くくくくくくくく  
あまのまきくくく  
水の石門とくくく  
馬糞捨くくく  
茶の湯あきくく

杜園 野水 荷兮 芭蕉 重五 杜園 荷兮 野水 芭蕉 重五 杜園 荷兮 野水 芭蕉 重五 杜園 荷兮



鶴えさのちとの月うけあり  
う勢吹ぬ社の日鶴ふ酒れきる  
菘織るまきと市ふ振まる  
空若川や烟塵千代まう微き  
つららの舞を川うのころ  
おのよこと布振寄あやもれて  
くまいたをちと然る三平カホ  
たられてくぬきききの離れき  
火あうぬ巨燈ふと人とえん  
門るのまふ糸子うりて藤。  
血刀うくの日の啼きこり  
旁よりく本所の時せつき  
うもまつ御意うくふく  
えれお巨根の懸とまきまき  
傍りのいそげ敷をと香  
白燕ほらぬぬくうねとはい  
宜きうくく叙と築る  
八十年とこの入る童母もく

野水 芭蕉 羽笠 荷兮 重五 野水 杜國 荷兮 重五 芭蕉 羽笠 野水 杜國 荷兮 重五 野水

つららのそむるセメのつま  
西南小桂の苑の川むむと花  
蘭のあやうくトホく門書  
傍のおふ買つたる女えてる  
向籠く葉とあらは日うくれ  
まかりまき持まりさる正月  
つみもゆる希きよの文  
富のりは具を瀬沿の急流く  
そまかりき南系の枕  
いさくして誰ともまぬ人の像  
泥あうらのまられた芥の根  
粥とくまらつとまふかどまり  
持るのトく澄入もる風  
少れくこたうく震や中うく  
はくれぬまをまきむくする

杜國 羽笠 芭蕉 重五 野水 杜國 荷兮 重五 芭蕉 羽笠 野水 杜國 荷兮 重五 野水

田家眺望

まきもや鶴の行がふらひおそ

荷兮

その朝日のあそびありて  
 櫻橋山家の侍をよまふ  
 ひきまきまの影とあはれ  
 音のれき具まふ月のあそび  
 的確童蘭切て  
 秋のころ橋のうたげ  
 街のそとに寺  
 寂として橋のたのめる  
 まふふ終るとまむの  
 旅進小鳥帽子の女ふ  
 春のあそび  
 あつたふと山福  
 麻のつりとり  
 ひととて  
 お月あそび  
 きふふ  
 浮雲ゆり  
 昔とて

芭蕉 重五 社園 羽笠 芭蕉 野水 重五 荷兮 芭蕉 重五 社園 羽笠 野水 芭蕉

乞食の暮をとりて  
 浪のころ小屋をり  
 清幸の進む  
 丁に思ふ  
 萱屋  
 芥子  
 とうとう  
 志の  
 おお  
 狗橋  
 豆  
 之段  
 伏見  
 りん  
 まの  
 む干  
 山

荷兮 社園 重五 野水 芭蕉 重五 社園 羽笠 野水 芭蕉 重五 荷兮 芭蕉 重五 社園 羽笠 野水 芭蕉

追加

つふえりあそ雅面ししとらゑ  
行ちああつらつねさうの雲  
つとこ芥もあふ繁とちかして  
捨つらうふとや川を朝か  
浪つら 輪のまん月と海  
ひらふ橋とまうの波阜山

羽 笠  
荷 分  
重 五  
杜 國  
芭 蕉  
埜 水

ひさこ

江南の珍碩あつらふこと送れりこれい  
是あ将あとも酒とあつらむ器あも  
あつら或も大樽ふ造ささくは酒をわ  
れとつらつらつらも異あつら 昔まて後  
の恵あつらつら用らつらつらつらつら  
はつらつらつらつらつらつらつらつら  
てはつらつらつらつらつらつらつらつら  
きつらつらつらつらつらつらつらつら  
郭もつらつらつらつらつらつらつらつら  
あつらつらつらつらつらつらつらつら  
産思とつらつらつらつらつらつらつら  
あつらつらつらつらつらつらつらつら  
あつらつらつらつらつらつらつらつら  
あつらつらつらつらつらつらつらつら  
つら

元禄三五月

越智 越人

OSUN





此よりゆくゆくまの山中 碩

翁主 珍碩主 曲水主

珍碩

路翁

いつくの名もむらうや春のま  
うれて此のまいさえぬ家  
編福のれくうふつらとさく出て  
空のそと目くぬ詩賦より  
世を蘇のまきとくまはふやうまき  
寂かなあつて月くおろく  
秋の色をたのそりせぬ  
こそくこれくはあふあわのけ  
うつりまのぬ誠と背ふはれまき  
ゆそくくく市のころるは  
統治のちひさくくもる川の端  
会併りくくとうむくくつて  
うくくくくまらうまは年のま  
居降の甲はたわくおとくれ

全碩 全通 全碩 全通 全碩 全通

聴ゆとくれき人の廻つき  
花いあつたよ月と織夜  
よふのさげ極のトと初日あり  
中綱あつる浦のまき舟  
は村の度きよまきあつるあ  
とろまんおけたわのまきといふ  
うくくくく世を運出くをくあ  
まことほむは酒のさきんきこを  
なうあやる秋の夕そくくひらさ  
夢まきあつる山の洞中  
うくくくくくくくくくくく  
をのくくくくくくくくくく  
恥くやまの息くくとくくく  
文書の勢あつた梨特く息  
たれ加減又といひあつた  
何くくせぬよあつる湯棚  
志のふたのとうくあつて英  
まきふくくくくくくくく

越荷

全碩 全通 全碩 全通 全碩 全通

汗の背をかきしるをこりけし  
ちりりよるをこりけしあけてあ  
るをさうり又百人の指をさ  
まの指をさるをこりけし

越人へ  
珍碩九翁一路通八荷兮十

今今今人

城下

決炮の音をふりしるを打丹か  
砂のやまの穂くくをらしく  
る風ふすすやの小貝拾をせ  
たまふる一川湖ひりりりり  
其のさうひ二人志しるを  
秋の秋まの物まうのこる  
女名花ふの細糸ふあさり  
目の中おのくをさるを  
さうり又川東さうり  
秋のさうり

野經

野經  
里東  
泥土  
乙州  
怒誰  
珍碩  
野筆  
里東  
泥土  
乙州

馬あむ糸を履をさるを  
一里さうり山の下の  
又知しるをさるを  
むれ世をさるを  
さうり又川東さうり  
秋のさうり  
女名花ふの細糸ふあさり  
目の中おのくをさるを  
さうり又川東さうり  
秋のさうり

乙州  
怒誰  
泥土  
乙州  
野經  
怒誰  
珍碩  
里東  
泥土  
乙州

○ひさこ

糊剛き夜意ふちいさき宿在客て  
 泥土 怒誰  
 ゆふくの舟ふ茶食喫出止し  
 里東  
 看経の楽ふゆきききききき  
 里東  
 四十八者のくくくくくく  
 乙洲  
 髪くせふ枕の跡を藤色くくく  
 野經  
 醉と酒同くくくくくく吹くく  
 怒誰  
 松村の花ふもふふふふふつさ  
 泥土  
 田の丘湯くくくくくくくくく  
 野經六里東六泥土六乙洲六  
 怒誰六珠碩五筆一  
 雑  
 龜の甲意らららら時を啼りせに  
 乙洲  
 唯牛 薑ふ風 のふくく 音  
 珠碩  
 百蛇の本俤仕舞もふのきて  
 里東  
 小舟をろふるうくうくの繩  
 探志  
 獨居くく奥のるららら蛇の舟  
 昌房  
 端端 流くくきやる 好焼  
 正秀

秋萩の序恭ふちうき防うる危  
 及肩  
 如名の如城の志川うありりり  
 野經  
 葉のまきまきまきまきまき  
 二嘯  
 まのやうなるかまをこのま  
 乙洲  
 大川をふ経めまを将居ちり  
 珠碩  
 んのまきまきまきまきまき  
 里東  
 山麓の香ふ吹をまきまきまき  
 探志  
 藤くくくく 歌くくく 夢い ちる 鳴  
 昌房  
 後への巾着さけて月あり  
 正秀  
 十ととととととととととととと  
 及肩  
 甚ふ雲を羽の町舎の今年来  
 野經  
 雀と雀ふ雀のぢくまきまき  
 二嘯  
 う守まきまきまきまきまき  
 乙洲  
 体いひならんやのわいぬる  
 珠碩  
 漆てうきふ漆 漆の漆まきまき  
 里東  
 探あまきまきまきまきまき  
 探志  
 鳴くくふ茶 雁の下とや甲 付  
 昌房  
 傳馬と鳴るまきまきまきまき  
 正秀

○ひここ

いさくくく陰一まちふ梗 及 野 經  
 むくくくくく 額 櫻 の 秋  
 けそくくと切符の紙ふん 乙 州  
 幸かの序ふもほのう 乙 州  
 喰物ふ味のつくこと 乙 州  
 嬉掃うらふ次了 里 東  
 目とあふさ鬼のうととく 探 志  
 ろんふとくくく 侍 昌 房  
 ちこくくふ子 正 秀  
 僅と集る 寺乃 及 野 經  
 きの次豆の日後ふ 二 嘯  
 こくくくくく 乙 州 四 探 志  
 昌房 正秀 及野 經  
 二嘯

田野

野道代時の角大師

正秀

明をとうまむ 野 經 の 額  
 晴ふこのややくあつ 全 秀  
 かまくまのうくく 全 秀  
 月影く 利休の茶と 全 秀  
 度く 辛と 全 秀  
 重く 皆つ 全 秀  
 斤く くの 全 秀  
 誓文と 全 秀  
 ちくくくくく 侍 全 秀  
 須广ハ 全 秀  
 杭の 全 秀  
 月少る 全 秀  
 せく 全 秀  
 けく 全 秀  
 福ある 全 秀  
 けく 全 秀  
 あひの 全 秀  
 ちく 全 秀

〇〇〇〇

ちと吹く居る禪門の祖又  
 本堂いまうと雲壁のちうら祖  
 羅後の杖志をて後いぬ  
 蓋と痛人の乃命を治あま  
 為とまうとむまうとく鷹うり  
 最後の定ふ紙幅と括あま  
 りと果ぬいふとまの財直  
 多わとくふ小判りあう草袴  
 秋いある他好の態草  
 兼り候も管て目えり後若紙  
 奈布子ひひく川おきこくう  
 浪山り元めくと吃られて  
 啼ありけしと痛ハ厚うらま  
 子親あ小人所の百あふり  
 やんた丸本の手わえ三  
 ちるたよま踏引くるまあり  
 山野のる踏ふもあうかけらふ

正秀十九 珍碩 十七

秀 碩 秀 何 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀

積みの

晋其甫序

徘徊の集つる事古今たりわも程さ  
 此是はゆめく記をう兼時あれや初歩  
 の身一とてそはゆるり魂のいふれを  
 ゆえりうためこくく似てるるうえし  
 く世うとくまうせくくくくくくくく  
 不度は変とまうむ五体とりうふ  
 及もまふとくくくくくくくくくく  
 かう波西りど人の骨うて人と作う  
 とくくまういままうとく雨とくくやうふ  
 けんゆさくやまれりう人ふん成てはま  
 とれ五の巻のわう結さるはる魂の法  
 けおろそりふゆらふやけまはあま  
 ぬのうくくくくアイウエオうくくくく  
 けうれくくくくくくくくくくくくく  
 不魂のうくくくくくくくくくくく  
 御のころう浮秀越くくくくくくく

○積みの

積り小善と云ふは、  
 多きしう流所あたらしうち  
 ぬと叫ひききあへく小  
 たりしと云と元とては集とつ  
 として積りぬといふ名付  
 う存もさぬと云とつり魂と  
 去来凡兆の事、  
 善

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

お

お〜〜を積り小善と云ふは、  
 あまけけと時自あるおの序の事、  
 時なきや並ひうの事、  
 来入り時自うけぬく路向の橋、  
 後時の程積りぬ事、  
 度時やいなりさう、  
 舟ふぬく事、  
 伊賀の境、  
 ちり〜〜を積り小善と云ふは、  
 一〜〜やあまけけの事、  
 事〜〜やあまけけの事、  
 たま〜〜れ〜〜の事、  
 新向り神鼓、  
 伊賀の事、  
 一〜〜も、  
 野水

芭蕉 其角 千那 丈草 正秀 史邦 尚白 曾良 元兆 乙洲 羽紅 昌房 去来 百歳 野水

○珠この

其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆

其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆

草津

其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆

霜月朔旦

其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆

貧文

其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆  
 其角 全 元光 嵐蘭 芭蕉 元兆

根のあし踏はまを戻ふも 史邦  
 脊門の入りふのくわふも 文草  
 しのむ雪ふまわれてつゆも 千那  
 毛のゆや浦のふらふのゆ 九兆  
 民士のふらふのゆやまのゆ 木節  
 のゆをふらふのゆのゆ 文草  
 もふもふらふのゆのゆ 路通  
 んまふて探ふふらふのゆ 且葉  
 探ふふらふのゆのゆ 杉凡  
 このゆやゆのゆのゆのゆ 其角  
 かゆのゆのゆのゆのゆ 暮年  
 見ゆのゆのゆのゆのゆ 智月  
 菊のゆのゆのゆのゆ  
 祀あり略し  
 首出のゆのゆのゆのゆ 竹戸  
 歌竹戸のゆ  
 魚のゆのゆのゆのゆ 曾良  
 探九

志のゆのゆのゆのゆのゆ 文草  
 探ふふらふのゆのゆのゆ 史邦  
 後楓のゆのゆのゆのゆ 野童  
 霧のゆのゆのゆのゆ 伊賀  
 呼ぶゆのゆのゆのゆのゆ 九兆  
 んまふて探ふふらふのゆのゆ 膳  
 神のゆのゆのゆのゆのゆ 其角  
 毛のゆのゆのゆのゆのゆ 史邦  
 わまふて探ふふらふのゆのゆ 羽紅  
 んまふて探ふふらふのゆのゆ 九兆  
 かりゆのゆのゆのゆのゆ 全  
 信濃路のゆのゆのゆ  
 毛のゆのゆのゆのゆのゆ 芭蕉  
 善光のゆのゆのゆのゆのゆ 其角  
 毛のゆのゆのゆのゆのゆ 羽紅

○猿の



誰とぞん 徒たつししきまのこひ 長崎 卯七  
ひつつけりやまふのくまき 去来

青西追悼

乳のうらふ世と後ししき降るは 尚白  
のく 髪いそく色の藤もきこの内 芭蕉  
降しきまあをぬいぬふぬぬぬぬ 乙 芴  
一もの我ふあせ海くき 文章

住吉奉納

お祈りや鼻息白一面の内 其角  
弟を修ふ又のまじきこもぬ 順琢  
あやくもちいゆーとさく 柿 全 祐甫

乙羽々新巻ふく

くふおと買うせし我ハ年忘 芭蕉  
弱法師 我門ゆき世降の礼 其角  
歳のおやあ徳又とまけりいれ 長和  
くし巻のまきいゆーの宿 去来  
くまのりいゆのまきけやぼらまの 全  
とくしやのりゆれまきいれ 明紅

やアられて又やまゆりろ糸の音 其角  
し松くくと人ふつとねつ年の音 路通  
くーの音 破れ袴の音くー 杉凡

夏

有明の面おこまやほくまき 其角  
まうまきまきりり方や時き 木節  
ゆきと様くーのしむらよほくま 芭蕉  
時まきりりふ限くーいおもな 尚白  
かきまきりりゆきまきこの内 梅 元兆  
まきまきいれいれいれいれ 智月  
蜀意あくやあの方め 角 楢 史邦  
入おのゆきまこの中やわくまき 羽紅  
ほくまきりれゆりかまのゆきま 文草  
んかまきり代まきりやほくまき 去来  
くひみまき我様まきけ時き 遊女 奥 劬  
松崎 一見の樹あまきりりりや 袴の色衣とよめりまきん

松崎や竹ふもどりのほろき返 曹良  
うそ我をうけしめらせよか人こそ 芭蕉

旅館をききしうきまどをさす

うらぬ茶のうらふあるも一はうり 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

そのふらうつーくくくくくく 其角  
きうくくぬ花と牡丹の姿うれ 江戸 全峯

別僧

ちんちんこのらんあさよりの花 越人  
きうあつのあるらんあつをけのむ 琳碩

おふけられたてをまうらうーふ

わーわー

似合しそくろりのきや法をのり 七人 杜國

まろくそくろりのあつーけしの花 嵐蘭

井はききふゆくはら 杜若 半残

起ておふまされぬ朝の雨の

起くのらんくくくくくくくく 仙化

題去来之嵯峨落柿舎三句

豆梅の如く本歌ゆれをふか 元兆  
破屋やわさと藤子のかけひ道 曾良

南都旅店

誰のそくくくくの歌の園の栢 尾 千那

洗濯やまのふゆくくくくくく 薄芝

豊國みく

竹のふれ力と誰ふくくくくくく 元兆

とけのふや島津くくくくくく 去来

たすのくや雅まの時の侍のまふ 芭蕉

杖ふゆくくくくくくくく 正秀

明石夜泊

晴毒やうれきまるとまの母 芭蕉

まろくや筑紫まろく 福一 越人

みゆきくくくくくくくく

石原骨くくくくくくくく 其角

櫻花入くくくくくくくく 芭蕉

深原の産まうくくくく 解 岩翁

さの 石まきくくくくくく 尚白

○様もの

みゆきよ日ち板くら死の遠るは

弟ひく

大板やえぬよ秋夏の六十年 伊賀 蟬吟

奥忍る館ふく

夏州や兵たつ夏の跡 芭蕉

這あよかひをうりれ境のみり 全

は境もあわゆるわらわら

こののゆふや

かろつう角ふつうけははだぬん 全

あ母るよあうう捨てたあふり 九兆

は秋夏の味なるこやあ母る 木節

る上の謂は弁ありうつさる 史邦

奥刃多五の郡ふ入て中於其の

の塚あつこやと尋はる道す

一里もあうりたうの方まはる

あうあうこつうつうつう

あ母るいあうあうあう

さうはやうつうあ母のめうり道 芭蕉

大和紀伊のさういよあうはあて

は秋の順礼とあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

つうりよあうあうあうあう

秋利やあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう

○猿この

まき葉の赤くくやうん 智月  
まき葉の赤くくやうん 花紅

志川の園をめぐり 芭蕉  
風流のくくや奥の田舎を

おののちとととと 全  
眉峰を面影あしてみれば

法隆寺開帳南無佛の字を拜む

内侍のくくまをうらみ 千那  
田の畝のまをうらみ 万乎

膳所曲水を横あき

まき葉の赤くくやうん 去来

勢田のまを二句

まき葉の赤くくやうん 九兆  
まき葉の赤くくやうん 芭蕉

三熊野へ清き水

まき葉の赤くくやうん 田上尼  
あれくちふ鶴とせりあまぬ鶴とれ 尚白

まき葉の赤くくやうん 半残  
まき葉の赤くくやうん

病後

まき葉の赤くくやうん 六段 何処  
まき葉の赤くくやうん 乙刃

焼取坪と化かす

まき葉の赤くくやうん 嵐蘭

銭別

まき葉の赤くくやうん 膳所 里東  
まき葉の赤くくやうん

まき葉の赤くくやうん

まき葉の赤くくやうん 其角  
まき葉の赤くくやうん 文章

まき葉の赤くくやうん 嵐雪

まき葉の赤くくやうん 探忘

まき葉の赤くくやうん 芭蕉

まき葉の赤くくやうん 槐市

まき葉の赤くくやうん 九兆

まき葉の赤くくやうん 千那  
まき葉の赤くくやうん 史邦





もくわくや破るふあてつたけい月夜 凡 夢  
つせよまらうてくる付

昔月や去移ふほる人よあん 亡人 子  
こりもふ蓋のあてまよとくうきう 之 道

雲を押し月を交ふあつぬと月夜 半 残  
月をせん伏元の坂の松 郭 去 来

翁と芽を令ふあ 伊賀 土 芳  
おのころし松をよえよ為月夜 伊賀 土 芳

加茂も傍 あつふ渡のつらゆし  
かの人たあつらわの 伊賀 土 芳  
おはるもらうてくるま 伊賀 土 芳

月夜や柳よりし 猿のこ 史 邦  
友達のつたふふとくう 伊賀 土 芳

おちふし 伊賀 土 芳  
おちふし 伊賀 土 芳

糸麻屋まきの月と人侍仲間 乙 刈  
吹風のおもやまよ月一川 元 兆  
おちふし 伊賀 土 芳

尚 白

向のよきあとも月をさる 曾 良

元禄二年つらうれ 元禄二年つらうれ 曾 良  
あて元禄のつたふ 元禄二年つらうれ 曾 良

古例とま 古例とま 曾 良

月夜 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉  
あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉

あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉  
あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉

あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉  
あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉

あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉  
あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉

あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉  
あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉

あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉  
あつふ 仲秋の望月と送る并して 芭 蕉

○猿の

旅枕藤のつこ念秋の下 千里  
 晴吟や浮舟系の葦麦畑 珎碩  
 上りとり下りるそと秋の天 九兆  
 舞つるはと者し 一 籠つり 半残  
 田舎同のうらやうりそと葉の尚 尚白  
 葉とわも始まらうらあうり 其角  
 言ちま小籠の鳴り色そとこれ 珎碩  
 と秋夜のおりりうら籠の秋 土芳  
 籠つてく始あまむうらふね 九兆  
 自題落掃舎  
 竹めりや梢くちうさけし山 去来  
 あらば竹ゆしうら籠の下おま 塵生  
 氷まし 竹切山のうすおま 九兆  
 神田系  
 これいこそいふあけ拍子のあけふ 九兆  
 神田系の籠うら川音 蚊足  
 桐まらうらあつまれうらと 九兆  
 花まらうらあつまれとまらうら 九兆  
 嵐雪

り秋のつみ日籠るそとたが 文章  
 とあたる秋の夕や風わうら 九兆  
 世の中い静謐の尾のひまうら 全  
 信奥の嵐あをさうら秋の音 荷兮

春

梅咲く人の愁の悔ああさ 露沾  
 上臈の山はなまきりうらうら 九兆  
 候しうらうらうら 九兆

梅り香や山は籠入らむのうら 去来  
 梅らうらや入らむの牛の角 句空  
 庭 真

梅らうらや砂利しそ流るそと奥 土芳  
 梅らうらや香まらうらうら梅の葉 半残  
 梅らうら香色酒のうらひの吹しき 其角  
 うらうら梅はつめとま梅のうら 其角  
 子良館の後小梅あうらうら 其角  
 梅らうら梅のつらうらうら梅の花 芭蕉





垣こゝろふらふらこゝろあけ柳か 遠水  
 よこゝろ川せき柳ふなるき柳のけり 尚白  
 ちち柳のちちけりやや程のほほまま 一日咳伊  
 ちちけり柳のちちまま揚のちちみみ 木白  
 侍のちちみみちちややちちりり月月 揚水  
 田家ちちたたくく

田家ちたたく

ままちちちちちちちちちちちちちちちち 猫のまま 芭蕉  
 ここららままちちちちちちちちちちちちちち 越人  
 ここららままちちちちちちちちちちちちちち 去来

露沾公よて餘寒の當座

ままちちちちちちちちちちちちちちちち 龜翁  
 ややののちちちちちちちちちちちちちち 尚白  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちち 龜翁  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちち 嵐雪  
 青はちちちちちちちちちちちちちちちち 九兆  
 向向ちちちちちちちちちちちちちちちち 其角  
 人のちちちちちちちちちちちちちちちち 尾根  
 ままちちちちちちちちちちちちちちちち 元志

尾根

陽をちちちちちちちちちちちちちちちち 荷兮  
 ううちちちちちちちちちちちちちちちち 百歳  
 かかけけちちちちちちちちちちちちちちちち 土芳  
 いいちちちちちちちちちちちちちちちち 水回  
 野をちちちちちちちちちちちちちちちち 九兆  
 ううちちちちちちちちちちちちちちちち 芭蕉  
 ややちちちちちちちちちちちちちちちち 配力  
 物脊のちちちちちちちちちちちちちちち 嵐雪  
 物脊ままちちちちちちちちちちちちちち 踏通  
 ここののちちちちちちちちちちちちちちちち 野水  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち 九兆  
 ままちちちちちちちちちちちちちちちち 沢雉  
 ままちちちちちちちちちちちちちちちち 嵐雪  
 ままちちちちちちちちちちちちちちちち 猿  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちち 猿  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちち 史邦  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちち 羽紅

○猿の

泥龜や苗代らの畦つこひ 史邦  
 障りまらる本澤の竹や虫の糞 昌房  
 菰葉やひたよあたるまのの乾 去来  
 ちり風ふろうまれ舞のむく舞の気 萩子  
 柳柳らもろあつこやとんあの子 羽紅  
 りのた寝をまきぬあ寝ん 鳥巢  
 里人の海をみるる田原のれ 荒推  
 だのまわしてあまふたり蕨のまや 半残  
 波をまきれてむねの蔵とぬかかす 桃枝  
 つののりつゝももあまむも 濠 園凡  
 日の光やこのこののねまめめ 珎碩  
 ちりあつてつむまのまきあ縁のま 土芳  
 雲のたやあままこつてあま 芭蕉  
 越より花強くひらきあのうらまのや  
 ちりあつてつむまのまきあ縁のま  
 柳の葉の樟の枝枝ふりいぬ 凡兆  
 うらまのまきあ縁のま  
 ろやあつてつむまのまきあ縁のま 杉凡

ひらうの巾の柄をまや組まのま 芭蕉  
 芭蕉庵のうらまのま  
 ままのまきあ縁のま  
 あまのまきあ縁のま 山店  
 畫讀  
 ちりあつてつむまのまきあ縁のま 芭蕉  
 向ひのまきあ縁のま 車来  
 ちりあつてつむまのまきあ縁のま  
 并のりつゝももあまむも 枝 羽紅  
 堀斗キうつせまの椿の那 坂上氏  
 ままのまきあ縁のま 芭蕉  
 ままのまきあ縁のま 利雪  
 東叡山ふあま  
 少筋のまきあ縁のま 其角  
 つねのまきあ縁のま 尚白  
 鶴のまきあ縁のま 凡兆  
 ままのまきあ縁のま 文章

○猿の

有明のまつくし 史邦  
たふふたつれてふ 千那

葛城のふりこころ

たふふたつれてふ 芭蕉

いづれ國を垣のたふふたつれてふ

八重の料ふたつれてふ

たふふたつれてふ

一里いれたふたつれてふ

亡父の墓東谷中ふたつれてふ

ふれ廿年の後ふたつれてふ

おふ松樹をたふふたつれてふ

うふふたつれてふ

暮れ松樹をたふふたつれてふ

まつりやたふふたつれてふ 園風

おふふたつれてふ 去来

りる信のたふふたつれてふ 凡兆

龍大ふたつれてふ 半残

照るふたつれてふ 長眉

大岩のふたつれてふ 曾良

道徳のふたつれてふ 嵐蘭

源氏のふたつれてふ 羽紅

揚子におふたつれてふ

庚午のふたつれてふ

たふふたつれてふ 北枝

たふふたつれてふ 凡兆

海堂のふたつれてふ 江船

大和のふたつれてふ

ふたつれてふ 芭蕉

ふたつれてふ 探丸

ふたつれてふ 智月

ふたつれてふ 山川

ふたつれてふ 伊式

ふたつれてふ

ふたつれてふ

木曾塚

○猿の

くそその石もわらうは雲のる 乙 弱

望湖水惜春

のまをそはのくことききる 芭 蕉

まの羽を刷ぬまの 一と純 去 来

一ふき風の木もふまの 芭 蕉

照川の朝のうめ川をえと 九 兆

たぬきとおもき藤池のら 史 邦

まのくたふきまのくも宵の月 芭 蕉

くふんくまを 名 邦 来

かきあくるまのまのく 杜 邦

もささくまのまのく やまのまのま 北 邦

何のまのまのまのく 来 北

里まを初く午の貝ふく 芭 蕉

ほつまのまのまのまのまのま 邦 兆

芙蓉のまのまのまのまのま

ぬおハまのまのまのまのま 蕉 来

三里あまりののまのまのま 邦 兆

このまのまのまのまのまのま 蕉 来

まのまのまのまのまのまのま 邦 兆

まのまのまのまのまのまのま 蕉 来

まのまのまのまのまのまのま 邦 兆

まのまのまのまのまのまのま 蕉 来

まのまのまのまのまのまのま 邦 兆

まのまのまのまのまのまのま 蕉 来

まのまのまのまのまのまのま 邦 兆

まのまのまのまのまのまのま 蕉 来

まのまのまのまのまのまのま 邦 兆

まのまのまのまのまのまのま 蕉 来

まのまのまのまのまのまのま 邦 兆

まのまのまのまのまのまのま 蕉 来

○接しの



星の光ふおちく居てハヤウツ  
命うまうま様集のここと  
さまうくふふくわいなる息とて  
浮世の果々これ小町あり  
何故に野々ふふれ海々  
りらるるふれハヤウツ  
よのひふふ風をさるるの光  
がほくこうめをのゆわく

九兆五芭蕉五去来五

灰汁桶のそちやとくきりく  
あつうかまうて宵を待てる 林  
秋をそまふくくくく海うけふ  
ちうくして睡十のううう  
ふ代経くくおとさおくあうて  
きよのまふたひく雪消る  
ふあうて肺ふ消るまの物  
摩那うらねふをのうれる

九兆 芭蕉 野 去 水 来 兆 蕉 水 来 兆 蕉 兆 来 蕉 来 蕉 兆 来 蕉

くめふのまほと冷つて風さる  
松のりふとくうとてま集よと  
かのおゆひくふいさ集てはじふ  
近せとくくく夜よりのふ  
今洋とくふふりく方のゆき  
あつ風をさるこのよひく月  
町内の秋をそまふりや  
ちうくくくくあはるるま  
さるるるふハヤウツ  
あつ風の死若うふまをくられつ  
くくくやハヤウツ  
集さるるあつのみとからる  
あつ風のあれふふりくわ風  
聴の池をくくあつ  
ままうくくあつあつあつ  
何れハヤウツ 根のま  
夕日あつあつあつあつあつ  
人もあつあつあつあつあつ

兆 蕉 水 来 蕉 兆 来 水 兆 蕉 水 来 兆 蕉 来 水 蕉 兆

○根の

うそつそふ自惚いそせてほぢん  
又小太半一の越と九也を  
境より田のちやそそついでたよ  
か茂のやうりいよそそ社ま  
お貴の尻そそそそそそそそそ  
るのやうりのそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ

九兆九芭蕉九野水九去來九

水 來 兆 蕉 水 來 蕉 兆 來 水

餞乙洲東武行

松さそままりこの家のそそけ  
かそあそらそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
斤陽そそそそそそそそそそ

芭蕉  
乙 切  
琢 碩  
素 男  
扇

二階のまあいそそそそそそ

形そあそらそそそそそそ  
橋のそそそそそそそそそそ  
わつそそそそそそそそそそ  
扇そそそそそそそそそそそ  
斤の刻のそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
扇の礼そそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそ

蕉 男 碩 蕉 扇 碩 男 素 琢 乙 芭  
兆 來 兆 蕉 水 來 蕉 兆 來 水

○猿この



芳ハぬれ紙の取所なき  
 小刀の吟又なる細工もこ  
 欄ノ火ともを大年の夜  
 うらめといふゆゑに法外の浦  
 むけはかたせきもかこさぬ  
 はまもといれめとくる破扇  
 せむけねきせとちとくも  
 晴るの備わらとくも保つこひ  
 保つこひとくもくもを教  
 形もとくもとくも今所を  
 うらめとくる牛の刻り紙  
 花あまといふゆゑに法外の浦  
 雛の使と保るくるのせ  
 芭蕉ニ 乙羽ユ 土芳ニ 弥碩ニ  
 園風ニ 妻勇ニ 猿雌ニ 智月ニ  
 嵐蘭ニ 九兆ニ 史邦ニ 去来ニ  
 野水ニ 正秀ニ 羽紅ニ 半残ニ  
 芳 残 園 残 雛 風 芳 雛 風 芳 雛 風 芳  
 史邦 野水 羽紅

幻住庵記

芭蕉州

石山の奥岩間のうら山有園分山と云  
 とけと園分寺の名とけあふ一蘆浦き  
 流とけとて嬰機下登る事三曲二百歩あり  
 八幡宮とせとるふ神那は法隆のそ像と也  
 唯一の家小甚忌ある事と两部を和らけ  
 利益の壁と同一と志とまやも又貴し且此  
 人の詣りたりといふとけさひ物あつとる傍  
 け於草の戸をよめとて根絶すとかこしる  
 りとけとて旅籠とくととけとて幻住庵とて  
 一の傍はじい富士菅沼氏曲水子の伯又とる  
 けじと今ハ八年計ひつふ成て正々幻住  
 老人のあとのとけせり予又市中とさる事  
 十年計つて二十年やちとさる善虫のみと  
 失ハ蝸牛の家と解て奥羽急浮の暑き日  
 よ面とこつとるすぬとあゆとくき北海の  
 善残ふきとを破つと今嵐湖ののけ不漂  
 雪の厚菓の流とてまうとてき花のつ年乃後

○核の





くささの ぬる川 色交の山  
時うあ 露ちく  
はらふら ぬるさや つか  
秋さささ 雲をさる 杖のあ  
御座の やさあ 友のやま

贈紙帳

おりのや 浅性ふうけと 橋りり  
いひこして 雲のまふら つか  
そら雲の こみこけの 雲  
秋や 葉の中の花うつさ  
もろくく 一葉ふら 結さる 雲  
お相ちぬ 雲さうまの 秋んこさ  
あつさあ ちくく つかさる 雲  
さあさ川 程さく つか風の 雲  
月夜や 浅と 浅月さる 雲  
さ川ささ 雲のまふら 杖のあ  
涼ささ 雲さる 杖のあ  
訪ささ 雲さる

野水 去来 元兆 千那 珍碩

野徑 里東 乙易 怒誰 探志 元志 泥上 史邦 正秀 柳陰 如行

推のあどさうて 雲やせさのあ  
月のうちや 多はくく つかさる 雲

昭所 美臣舟井  
水 隠

文山云々

振所 扇や 早苗の つかさる 雲

麦の 粉と 土産を

一袋を つかさる 雲

書音

一袋を つかさる 雲

夕まや つかさる 雲

登猿腰掛

秋風や 田との つかさる 雲

贈葉

あつさあ 雲さる 雲

あつさあ 雲さる 雲

包紙よ書

あつさあ 雲さる 雲

あつさあ 雲さる 雲

あつさあ 雲さる 雲

あつさあ 雲さる 雲

桐の権やきりてつひのつゝも 昌房  
 里のつゝやめつゝつゝのつゝも 何処  
 啼やけつゝつゝつゝのつゝも 越人  
 越人ともつゝつゝつゝも 等哉  
 蓮の葉のつゝつゝつゝつゝも 明年  
 明年生る旧庵 岩蘭  
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝも 同夏  
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝも 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比  
 彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感  
 物写興而已矣洛下逸人允兆去來  
 隨翁遊學謀儲竹窓躡等凌節斯有  
 歲屬撰此集玩弄無已自謂絶超狐  
 腋白裘者也於是四方唵友憧々往  
 來或千里寄書々々中皆有佳句日蘊

月隆各程文章然有昆仲騷士不集  
 錄者索居窳栖為難通信且有荒倪  
 婦人不琢磨者鹿言細語為喜同志  
 雖無至其域何棄其人乎哉果分四  
 序作六卷故不遑廣搜他家文林也維  
 貳元祿四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽  
 旅亭偶會兆來吟席見需記此夏題書  
 尾卒援毫不揣拙庶幾一蓑高張有補  
 于詞海渙人云

風狂野衲

丈艸漢書  
 正竹書之

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

續猿蓑

八九百をてる傳る柳う形  
まのうゝまの畠なるまを  
神あらるるまをその神織を  
因いとてつく先のふまひ  
きのつづく目初とある月の巻  
物脊うれて机をうりなふ  
流折もこゝい風ふれれり  
孫の終とる祖父の傳沙  
綴さしあへてほくろの伝力  
膝をまよふまはや雁の伝  
物束のわきをうけ賣らふまて  
十足をうりのまあへ出うり  
毎のまふふおぼやておりらま  
何らまうのちと門の書つけ  
いつくくう陰いほほれまきつ  
やのまふまをまのまつて

芭蕉 沾圃 馬里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃 蕉里 沾圃

○續猿















花をて竹をる新のやほさか 酒堂

馬をける酒をよあそひて文をる

由碑のまゝふふいひゆらうふ

湯の熱く入るのきせよ室の光 惟然

眺みよて海をされらうとらた 支考

人のきよくかゝるゝさ川橋 沾徳

らゆりやや中への花の水面 榛雄

七よりあふふあふるや中ふ 陽和

又の所ありふらうやを川橋 乙洲

吹流とむらうきおる老木ふ 木節

さるをよあふうんをたそつ橋 咕荷

二の橋やさくく吹さむ網の鼻 子珊

善美のむ方ふひうく橋ふ 卓袋

田家

蜻蛉の名物とまん山さくら 李里

咲くさる花や橋ふふ十石 桃首

山門ふ花ものくくふの山さう 一桐

なれ本の花もあうらう花の所 如雪

花ををきせしてゆきし人の維 其角

それやふふをよあふ花のま 少年 鷹

ぬりまけぬものまのや折の花 卓袋

一日の光えのあそや 且ぬ寺 沾圃

八き橋まふと色移るまのまふ 全

若菜

陽流やまほるほう土あうら 嵐雪

東の吹やむのころまうれ 曲翠

夕陽のあふきまのまのま 孤屋

一うふの牡丹のまのまのま 尾頭

梅附柳

まのやまをまののふ月と梅 芭蕉

まのらまのやまのまの梅の花 野水

まの梅のあまのまのまのま 其角

里坊の碓まのまの梅の花 昌房

投入や梅のおまのまのま 良品

病僧のまのまの梅のまのま 曾良

あうらうのまのまのまのま 万乎

續後

魚日  
千川  
大舟

遊糸  
千那  
意元

李由  
九節  
巴文

其角  
史邦  
智月

芭蕉  
去来  
洒堂

傘下  
長虹  
野童

鳥 附魚

鳥附魚  
其角  
史邦  
智月  
芭蕉  
去来  
洒堂  
傘下

長虹  
野童  
峯嵐  
槐市  
河瓢  
釣帚

芳野西河の歌

土芳  
圃水  
子珊  
山蜂

其角

春草

正秀  
此筋  
羽紅  
榊雛

續猿

宵のるるや土半のまじり  
 車來  
 荒雀  
 馬  
 拙侯  
 乃龍  
 正秀  
 夕可  
 一桐  
 圃若  
 探丸  
 支考  
 美已百  
 柳梅  
 唯然  
 闇指

柚 庭 附 明 葉

白日 志 門 也

さうぢや月ふらふら梅の意  
 うまき意ふらふら梅の意  
 あゆらふらふら梅の意  
 とまりてん 廻い 廻い 廻い  
 文 文 文 の う ま き の 梅 の 意  
 疎の意 おおの 疎の 意

風吹く小窓のまはるる少  
 雪 意 行

春 鹿

春 耕

振るる けりや 鹿 鹿 の 鹿 の 角  
 木 節  
 此 筋  
 一 鷺

桃 附 枝

白柳や ちつとくも 春を水の色  
 介 戎  
 雪 芝  
 水 鴨  
 其 角

江東の春由 御文の懐旧の法  
 おのく 經文の  
 光の

小阪 綿 小 芝 せ せ 玉 つ づ ぎ 角 上

後ハ梅ノ花ニシテ早クも花見候 梅ノ花  
五あつてなる花梅のわその宛 洞木  
ちり候あまうりわらうもよ結てる 野坡

款冬 附 野 野 藤

山吹や花不干とる 善一 蘭指

田家の人小對して

山吹や花不干とる 善一 蘭指

山吹や花不干とる 善一 蘭指

山吹や花不干とる 善一 蘭指

庚申

山の隈とちうとる 魚あつとるの月 魯町

夫の附 夫を 佳

およとるその花のり花をのり 前口

およとるその花のり花をのり 前口

およとるその花のり花をのり 前口

およとるその花のり花をのり 前口

およとるその花のり花をのり 前口

およとるその花のり花をのり 前口

支考

春多や花のりつらふ 花不干とる 桃首  
花不干とる 桃首  
つらふ 花不干とる 桃首  
花不干とる 桃首

沙干

のりつらふ 花不干とる 桃首

のりつらふ 花不干とる 桃首

雑春

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

あつとるやあをれ 初もも加候 許六

三月

三月 文浪

○續猿



織女を白濁賣のふゆり那 支考

感思

あやかしふまゝとて居 武<sup>少年</sup>仙  
遠道とてまのうれいなる所は 百威  
くらしとや雅奏するその守りき 尚白  
まごめの見ふつらふく一蝶の貝 圃滿  
扱方の後りつらふくやまきと治 山峰

詩人としての名譽と顛倒をとのす

と老父の文ふち紙一はれ

危日や おぼろをさるのうらま 千川  
人もんぬまを流のうらみの梅 芭蕉  
あやめあやのうらみ跡しうらま 其角  
蝶の世何海まうらやまうらうら 嵐雪  
万葉や ちかきふらうらておの陰 去来  
まうらう梅ふらまらるるおのさか 土芳  
とつらまやうらくはるらるるおの細法 凡睡  
ふらふらとてとまらうけて 猿  
えりやまてとらうらりの梅の氣 猿雄

ふらふらハまの 葛栗  
脊まゝとて自らおとんせをさるの夫 野童  
蓮葉のまらふらとて包尾の網のそり 耕雪  
魁のまのまのまをさるく西日か 左柳  
くつらまをさるくおの梅のうら比丘尾 前川  
枇杷のまのまをさるくおの梅のうら比丘尾 斜嶺  
世のまのまをさるくおの梅のうら比丘尾 山峰  
海のうらまをさるくおの梅のうら比丘尾 仕行  
えりやまをさるくおの梅のうら比丘尾 竹戸  
残者まらうらうらに流まらうらうら 是棄  
あやめあやや餅ふらうらうらうらうら 沾圃  
あやめあやのうらまをさるくおの梅のうら比丘尾 圃角

夏之部

郭公

曉の電とてさるくおの梅のうら比丘尾 其角  
あやめあやのうらまをさるくおの梅のうら比丘尾 文草  
あやめあやのうらまをさるくおの梅のうら比丘尾 曾良

○續録

男魂のあふれり〜朝顔の山 支考  
ついでのもよ色せりあふれり 如雪  
燕の居り〜むらりや邦々 芦本  
ほろり〜むらりや邦々 芦本

此白く〜山の麓を〜花の香〜  
色うらら〜色

舞のあふれり〜中や〜 沾圃  
木附草花

里〜のあふれり〜あふれり 野菘  
園中ニ夕

此中〜のあふれり〜川を〜花の香 此筋  
あふれり〜花のあふれり 千川

山家の百合 素龍  
白き〜花のあふれり〜花の香 支考

あふれり〜花のあふれり〜花の香 尾頭  
あふれり〜花のあふれり〜花の香 沾圃

あふれり〜花のあふれり〜花の香 抽候  
あふれり〜花のあふれり〜花の香

あふれり〜花のあふれり〜花の香 沾圃  
あふれり〜花のあふれり〜花の香 芭蕉

あふれり〜花のあふれり〜花の香 炭蘭  
あふれり〜花のあふれり〜花の香 残香

あふれり〜花のあふれり〜花の香 此筋  
あふれり〜花のあふれり〜花の香 白雪

あふれり〜花のあふれり〜花の香 良品  
あふれり〜花のあふれり〜花の香

あふれり〜花のあふれり〜花の香 芭蕉  
あふれり〜花のあふれり〜花の香 至曉

あふれり〜花のあふれり〜花の香 凡弦  
あふれり〜花のあふれり〜花の香

あふれり〜花のあふれり〜花の香 早苗  
あふれり〜花のあふれり〜花の香

あふれり〜花のあふれり〜花の香 長崎  
あふれり〜花のあふれり〜花の香 閩指

あつちの種ふくれ... 魚同  
田種奇まう... 重行  
一田く... 北枝  
あつちの... 支考

虫

あつちの種ふくれ... 許六  
あつちの種ふくれ... 野萩

納涼

あつちの種ふくれ... 半残  
あつちの種ふくれ... 惟然

源川の...  
史邦

あつちの種ふくれ... 重翠  
あつちの種ふくれ... 社半

漫興三首

あつちの種ふくれ... 洒堂  
あつちの種ふくれ... 支考

あつちの種ふくれ... 雪芝

あつちの種ふくれ...  
游力

あつちの種ふくれ... 去来  
あつちの種ふくれ... 正秀

あつちの種ふくれ... 土芳  
あつちの種ふくれ... 我眉

あつちの種ふくれ... 里圃

盛夏

あつちの種ふくれ... 野萩  
あつちの種ふくれ... 万乎

あつちの種ふくれ... 正秀  
あつちの種ふくれ... 乙州

あつちの種ふくれ... 怒風  
あつちの種ふくれ... 素覽

あつちの種ふくれ... 我峯

續後

あつとよや... 印 苔  
静あつとよ... 卓 袋  
静あつとよ... 里 東  
まよれいじら... 沾 圃

竹の子

菊... 可 誠

あつとよ... 曲 翠

牡丹雨 附 夕立

あつとよ... 不 玉

あつとよ... 芭 蕉

あつとよ... 沾 圃

あつとよ... 拙 候

あつとよ... 苔 蘇

あつとよ... 曉 鳥

あつとよ... 圃 水

蟬

あつとよ... 正 秀

あつとよ... 胡 故

あつとよ... 乙 洲  
あつとよ... 曉 鳥

のり

あつとよ... 兼 蛤

雑夏

あつとよ... 杉 風

あつとよ... 荊 口

あつとよ... 如 真

川 指 あつとよ

あつとよ... 文 鳥

あつとよ... 葛 栗

あつとよ... 水 鴨

あつとよ... 馬 覓

あつとよ... 重 翠

あつとよ... 野 童

あつとよ... 水 鴨

あつとよ... 水 鴨

晋の漢明とつらやい

○續表



夕月や若さをのぼる人のけり	闇指
夕月やうつかりのつこりのあり	涼兼
夕月やほろほろのぼるはらへ	不玉
平切の梨あまのつこりゆえ	配力
夕月やあまのつこりゆえ	左柳
夕月やあまのつこりゆえ	圃水
夕月やあまのつこりゆえ	山蜂
夕月やあまのつこりゆえ	風因
夕月やあまのつこりゆえ	需笑
夕月やあまのつこりゆえ	重友
夕月やあまのつこりゆえ	泥片
いせのいづれあつてかみのをど	
あひいゝまゝ	
うらまえてあつてあつてあつてあつて	支考
あつてあつてあつてあつてあつて	空牙
あつてあつてあつてあつてあつて	如真
あつてあつてあつてあつてあつて	宗比
あつてあつてあつてあつてあつて	木枝

夕月やあまのつこりゆえ	判合
夕月やあまのつこりゆえ	丹瓶
夕月やあまのつこりゆえ	野萩
夕月やあまのつこりゆえ	正秀
夕月やあまのつこりゆえ	水草
夕月やあまのつこりゆえ	景桃
夕月やあまのつこりゆえ	馬寛
夕月やあまのつこりゆえ	里東
夕月やあまのつこりゆえ	牧童
夕月やあまのつこりゆえ	芭蕉
夕月やあまのつこりゆえ	全
夕月やあまのつこりゆえ	猿
夕月やあまのつこりゆえ	雄

○續様

七夕

文りやあ田のくんのたの川 惟然  
 早人言とえんまきし海きお島 涼葉  
 形形のの毛きりくや早の歌 東潮  
 たぬりことろぬれつちさうさき 沽圃  
 秋風やまき 晩の園わち 乙州

立秋

粟めりやをよほよるくらぬの秋 露川  
 秋の川や中あゆりくまは草 尤次

秋草

秋の草の遠きを枯枝か 柳梅  
 細くせんあふぬ枝のつらさか 随友  
 女帝花わひぬる骨の染うゆ 濁子  
 さえれく特夜の杖ふもくうれぬ 馬寛  
 一きちのさめふちうく 加道 鳥栗  
 う園ころけちうれやあまらま 支浪

贈芭蕉菴

百合いとさきまきとほる合ふ 風麥  
 さう眼のあやうくしあつまの苑 史邦

秋のりのまふものくや霧は花 万平  
 霧は花のるのふる村はあうく 芭蕉  
 霧は花のちうくあふりぬか 至境  
 おくやるんあまらる秋の舞 雪芝  
 若のまらやのくくくくく秋の風 荷分  
 山人のまをまをまをまをま 桃妖  
 風あふまきくくくくくくく 杉下

朝のうか

おれの春うまつくむ薄月秋 田上尼  
 あさうわの遠ふてあさう御小 闇指  
 あさうあさうわくくくくく 風麥  
 おのうあまをれ一人や 其角

虫附鳥

きわうくの情ふほほじいんか 可南  
 竈るや教ふおつくうらり細 北枝  
 火の情て胸ふすううううう 正秀  
 秋のあやまき 轟とまきくく 水鷗  
 うのまや形ふ細今く月の歌 杜若

續後

探丸 葛栗 示峯 文草 馬覓 氷固 支考 芭蕉  
 秋風や二葉もよこの流をせ肘 遊力 式之  
 雀子の聲もよよひ秋の風 支考 爪國  
 何ふうとかがらうり秋の風 支考 爪國  
 松の葉も細きよゆぬ秋の風 圃燕 九節  
 おのらうらうらよの志もあこを分ふ 九節 圃燕  
 ふんたる也やうらふむらふら黄 九節 圃燕  
 あれくこまを海のやうなれ 猿 雖

稲妻 少年 東  
 稲妻くくるるるのまきく稲の夜

宗比 土芳 芭蕉  
 輪もやをよふるくもる海のと  
 四下の木輪もあふるもりの稲  
 いまのまや園の方けみ佐のま

木實 附 菌

為有 玄虎 酒堂 重翠 沾圃  
 園栗の落て花よりを分け  
 炭焼ふ炭焼くつむ後う那  
 秋空をやりわらうらも柿の色  
 枯んくと草をわらう梅もか  
 大の草や枯れ花も一葉  
 伊賀の山中ふつ叟の室居と傍ひて  
 松茸や秋くうらうら山の形  
 小川草や志くぬまのまのへうく

芭蕉 惟然  
 楓  
 鹿  
 北 鯤  
 尾まらふおのの鹿や風の音  
 一 酌  
 農 業



起しきり人ハ心くろく草まの飛 車庸  
あのちよ程出むく小極念小 買山  
さきさきけるるりくろく晴の極 如雪

りせの汁後山おれとそそれく  
草まのちくくくくくくくくくく 芭蕉

子端前くくくくくくくくくく 乃龍

山雀のそそくくくくくくくく 斗從

居りよくくくくくくくくくく 支考

了れのをくく 芋のまんと刈 全

机をくくくくくくくくくく 惟然

百あつてくくくくくくくくく 木節

大師のくくくくくくくくくく 沾圃

そのくくく 西瓜とくくくく 沾圃

あつてくくくくくくくくくく 葛平

あつてくくくくくくくくくく 濁子

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

あつてくくくくくくくくくく 支考

題画尾

ひるくくくくくくくくくく 兀峰

情りくくくくくくくくくく 丈草

あつてくくくくくくくくくく 野水

あつてくくくくくくくくくく 乙洲

あつてくくくくくくくくくく 芭蕉

あつてくくくくくくくくくく 芭蕉

あつてくくくくくくくくくく 芭蕉

あつてくくくくくくくくくく 芭蕉

あつてくくくくくくくくくく 芭蕉

續録

あつてくくくくくくくくくく 芭蕉



袖の色や露あつらふるまゆあ 其角  
菊の香も味もつとく霞や萩の中 桃隣  
八重のるやあつらふる葉の香 沾圃  
何れのかさしとくさくさの枝 曾良  
葉もあつらふる葉とあつらふる 馬寛

柴葉の隠士マサ達の琴を驚かす  
やのうよ葉も梅のたふらふと  
むらりり造化りつとふふな  
分その葉をすまふておのつ  
なうとあつらふるつとあつらふる  
琴もつらうけつとあつらふる  
らん竹洞老人も琴を送られり  
そとつらうつとあつらふる  
あつらふるつとあつらふる  
あつらふるつとあつらふる

素堂  
草附木  
あつらふるつとあつらふる  
曲翠

水心の花のつとれや萩屋一基 惟然

范蠡う趙南のつとれを  
山家集の題よあふ 芭蕉

つとれとつとれさぬ葉のあつら 車庸

山をさるゝえつとれつとれ 土芳

あつらふるつとれつとれ 露笠

あつらふるつとれつとれ 沾徳

あつらふるつとれつとれ 露沾

あつらふるつとれつとれ 惟然

あつらふるつとれつとれ 枳風

あつらふるつとれつとれ 一  
道  
あつらふるつとれつとれ 杉風  
あつらふるつとれつとれ 挑醉  
あつらふるつとれつとれ 乃龍

續椽

草花ふもつてくまの暗あり  
 利牛  
 中つ枝くくの尻のふり  
 支考  
 あくくくくくくくくくくくく  
 智月  
 風や背巾吹く牛のあつ  
 凡介  
 本枝や川田の畔の落をの  
 惟然  
 うらうらや葉まきこち平の角  
 壁生

夷講

えいせい海那うりよ津まきうら  
 芭蕉  
 えは原海那うりよ津まきうら  
 利合

鳥付いと

のののののののののののの  
 句空  
 産屋あくくくくくくくくくく  
 葛栗  
 追つてきて雪ふくくくくくく  
 文草  
 少あちとくくくくくくくくく  
 岡指  
 入海や夜の手くくくくくく  
 芭蕉  
 聖くくくくくくくくくくく  
 佐木  
 くくくくくくくくくくくく  
 利雪

うらうらと海もふくくくくく  
 車庸  
 見え遠やも枝はくくくくく  
 谷水  
 つゆふとつゆふとつゆふとつ  
 杉凡  
 かくくくくくくくくくくく  
 拙候

松父まきくくくくくくくく  
 浮く紙の川あつてくくくく  
 月 附舎

冷りのや門実あつてくくく  
 里圃  
 あくくくくくくくくくくく  
 文草  
 何ゆい藤入すくくくくく  
 小春  
 かくくくくくくくくくくく  
 文考

埋火

抑大やゆきくくくくくく  
 芭蕉  
 掃くくくくくくくくくく  
 桃先  
 自作くくくくくくくくく  
 洞木

雪

初雪や門あ枝あり夕まくれ  
 其角  
 胡くくくくくくくくくく  
 全

鷗鷺家ハとてうらとてき 雲 夕菊  
 七とて色とてあつとてあつとて 鳥 柗  
 ふつとてあつとてあつとてあつとて 支 考  
 丘とて色とてあつとてあつとて 圃 吟  
 心とて色とてあつとてあつとて 文 草  
 整判とてあつとてあつとてあつとて 陽 和  
 浮かえちれとてあつとてあつとて 配 刀  
 非 樂  
 おれおれおれおれおれおれおれ 史 邦  
 今とて色とてあつとてあつとて 路 草  
 清とて色とてあつとてあつとて 馬 覓  
 及又の門とてあつとてあつとて 許 六  
 振とて色とてあつとてあつとて 沾 圃  
 媒 掃 附 離  
 燐とて色とてあつとてあつとて 残 香  
 燐とて色とてあつとてあつとて 黃 逸

少とて色とてあつとてあつとて 馬 覓  
 燐とて色とてあつとてあつとて 開 如  
 燐とて色とてあつとてあつとて 惟 然  
 燐とて色とてあつとてあつとて 岱 水  
 解とて色とてあつとてあつとて 荒 蒲  
 りとて色とてあつとてあつとて 馬 佛

歳暮 附 節季候 衣配

らとて色とてあつとてあつとて 曾 良  
 門とて色とてあつとてあつとて 里 東  
 堂とて色とてあつとてあつとて 草 士  
 積とて色とてあつとてあつとて 車 来  
 大とて色とてあつとてあつとて 万 乎  
 袴とて色とてあつとてあつとて 李 由  
 年とて色とてあつとてあつとて 其 角  
 赤とて色とてあつとてあつとて 正 秀  
 川とて色とてあつとてあつとて 菽 子  
 梅とて色とてあつとてあつとて 稜 雖  
 天とて色とてあつとてあつとて 惟 然

○ 續 琮

清々秋よきと結をてとの事

はりの圖司呂九う羽うより事  
わらわらして浮勢もあまらそわらわら  
そわらわらしての事かうとていひし  
今いあまらとていひし

管へ山あまらおもあま羊の事 芭蕉  
全に上まらしてんすのおまの事 支考  
所へまらおもあま羊の中 土芳  
まらまらお弱くしてぬる 尚白  
まらまらおの物まらとていひし 桃後  
裁層へまらふりむ川名 山蜂  
一まらうておらうて 利合

雑冬

少年風ふまらとていひし 斜嶺  
植布へ何風まらとていひし 土芳  
井のまらおらうとていひし 李下  
まらまらお山伏村の 仙杖  
まらまらおらうとていひし 圃仙

巨魁よりまら少り時を 雪芝  
山陰へ樹の尻振く 口谷  
廻りへ人春の根のまら 沾圃  
兼川へまらとていひし 杉風

釈教之部 附追善良傷

涅槃

涅槃像あまらとていひし 沾圃  
福めん金毛 芭蕉  
山寺へ猫ちんを 不撤  
貧福のまらとていひし 山蜂

灌佛

灌佛やつとていひし 曲翠  
ちんまら佛うまらて二三日 不玉  
灌佛や釈迦とていひし 之道

鬼祭

管あまらとていひし 嵐雪  
まらまらおのまらとていひし 去来

○續核

世の成や成るとやとくふふ 沾圃

甲戌の夏大津ふゆとらつて

かきつり清息せしむるに四里ふ

帰中としまきといふむし

あつたれ杖くまらぬの暮糸 芭蕉

悼少年二句

うれしきや麻木の葉もどく遊み 惟然

その寂をとりぬそふ秋の風 支考

徳念の龍口寺少傍く

首のたぐはぬ舞の長きく時つ 木節

とらふや移まぬる榎のぬ 支梁

市新條

袖も移るとらふれあふく 沾圃

臘八

勝とさつりて足ぬハ細きけ 許六

何のあれくは向きくハ大津條 如行

雜題

洛東のま如きみしてそまき業

罪咎の時

深くはつたふらつる 念佛が 去来

あつとれとこと二とまきくはつた 智月

く細やあつたふらつる 佛立世 乙洲

あつたふ川紙回つた 重翠

あつたふ湖のる 念佛 野坡

あつたふ岸のる 念佛 支考

旅之部

送別

乙辰七年のまきとれつた

あつたふ 雁のえ世のふれ 荷分

あつたふ 柿のふらつる 惟然

許六くあつたふらつる

旅人のふらつる 推の花 芭蕉

留別

洛の惟然つた宅より古くふらつる

氣とらふとこの草とらつる 文章

○續據

新のふのち〜〜〜〜〜 芭蕉

甲斐のふのち〜〜〜〜〜

山崎のふのち〜〜〜〜〜

高よりて舟のうら〜〜〜 木節

猪まやほ世と〜〜〜 越人

あ〜〜〜〜 野徑

出羽のふのち〜〜〜〜〜

のふのち〜〜〜〜〜

と〜〜〜〜 公羽

十〜〜〜〜 許六

大〜〜〜〜 全

くゆのゆ

く〜〜〜〜 曾良

〜〜〜〜〜 猿雖

四〜〜〜〜 我峯

あ〜〜〜〜 史邦

田國のふのち〜〜〜〜〜

又〜〜〜〜〜 呂九

我藩園〜〜〜 沾圃

常陸の園ら〜〜〜

り〜〜〜〜

お〜〜〜〜

た〜〜〜〜

ま〜〜〜〜

縁〜〜〜〜 支考

と〜〜〜〜 全

え〜〜〜〜

ら〜〜〜〜

驛〜〜〜〜

岩〜〜〜〜 芭蕉



